



東海道行脚 (五)

田中好

箱根

箱根八里は腕でも越すが

越すに越されぬ大晦日。

こう歌つてしまへば天下の險路、箱根峠も難作なさそう

だが、いつも難事の譬に引き出される程、夫れ程難路であつた箱根峠、元和四年東海道の官道に定められてから、鐵道東海道線が開通した明治二十二年までは、京ミ江戸ミの唯一の交通路で随分人を泣かせたものだ。

往昔の旅人を悩ました箱根路は今の箱根峠ではない。時

代に依つて屢變更されたものだ、新編相模風土記に依るに、何でも湯本から湯坂に登つて城山の山頂を鷹巢山に出

て蘆の湯の邊を通つて元箱根に出てゐる、詰り大昔は山嶺に東海道があつた譯だ、今も新國道に沿つてゐる塔の澤の

手前に山嶺道路の入口が見えてゐる、夫れが最古の箱根路だ、その後も權現坂から北に折れて二子山の西の麓から、

元養の河原にかゝつて姥子の邊から蘆の湖の北岸を通つた

ここもあつたが、元箱根から社地を通つて蘆の湖の東北岸に添つて神宮山の麓を經、姥子路に連絡したここもあつた

のだ、東關紀行の源親行が旅したときは、唯だ蘆の湖と箱根權現の自然を賞めてゐるだけだが、夫れでも此最古の箱

根路を通つたのだ、阿佛尼の東下り十六夜日記は、いさか

かしき山を下る、人の足もさびまりがたし湯坂さびいふなる、かろうして越えはてたれば又麓に早川さいふ河あり。

と言つて東海道が山頂であつた爲に、上つたり下つたりした坂路につかれたと見え、湯坂より浦に出て、日暮れかゝるに泊るべき所さほし。と録してゐる。文明十八年に旅行

した道興准后や林道春の丙辰紀行は、矢張り此山頂路を通つたのだ。

○

今人が舊道だと言つてゐる箱根路は、徳川時代の東海道で元和四年に松平右衛門大夫正綱が命を奉じて開いたものぢや、此處に箱根の關所も設けられ、小田原と三島とから民を呼び集めて箱根宿を拵へた、夫れが徳川時代の箱根路と宿驛だ。

其のお蔭で出來上つた箱根路は、山嶺を捨て、低地を選んで慥へたのであつたが、夫れでも山が深い爲に女子供は恐ろしかつたのだ、歸家日記の主人公井上通女は、左も右もかさなれる峰々そびえて谷深く、落合たる水の岩間を行きなやみて、むせぶ昔なども恐ろしきまでに聞ゆ。と言つて恐怖の念に惱まされてゐる、随分急坂な所も多かつたらしい、實際通女が言つてゐるやうに。のぼる所はあふぎたふれぬべく、下る坂にはまろびや落ちぬべきと危く、心を

くたく事たびくなり、常の言草にわらはべもいふなる、

淨土真宗の高祖親鸞上人、東國の教化を終つて歸途隨僧

かしの木坂さるすべりこて、ここ

に別れた竹の平、浪花節に囃されて

に險しきは、げに猿もあしを止め

ゆる神崎東下りて名高い醜茶屋、今

がたくやごぞ見ゆる、重き荷なぞ

も昔を物語顔である。

負はせたる馬ごも、いごあやふげ

路側に對立してゐる杉や松の並

にかはゆくみゆ。こ言つた檜木坂

木、徳川の盛時を物語るものばかり

や猿滑坂夫れから女轉坂——隨分

だ、併し道を見て行く私の爲には道

昔から旅人を苦しめたことだらう。

幅二間だこ決定する根據を興へて吳

北條氏の權勢を偲ばせる早雲寺

れる位だ、路面は石疊、新しい言

やら、井上通女が憩んだり岡部日

葉で言ふこ石鋪裝道だ、文久二年徳

記の主人公加茂真淵の宿つた畑

川家茂攘夷の詔勅に依つて上絡する

宿、夫れから盛勝五郎や初花の墓

時に敷詰めたこ言はれてゐる、全山

なご興味ある史蹟として旅人の杖

に互つて敷詰めたのを後から剝いた

を曳くものが多い。

のかわも判らないが、早川から湯本茶

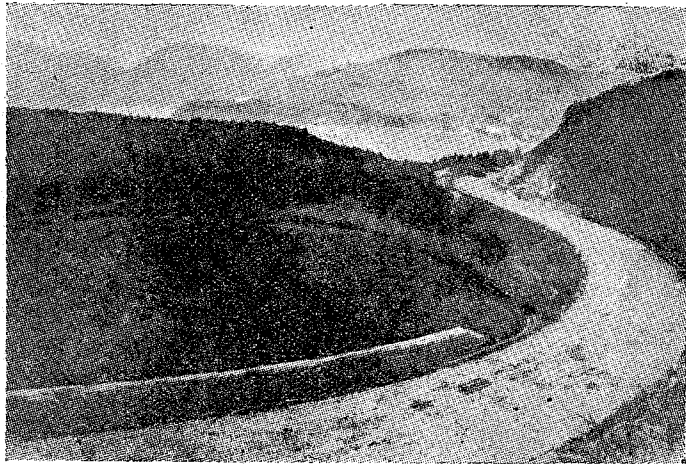
やむ子おぼ

屋までは餘り心にこまらない。

あつてかへる旅の空

好きに舊道を通らなくても可いのであるが、徳川氏三百年

心はこゝに残しこすすれ。



間官道として役立てた有名な箱根路に敬意を表したいのミ

を開墾した、夫れでもまだ温泉利用の爲には不充分である

夫れを知らなくつては、箱根を物語る資格が無いと思つたからだ、

徳川時代の箱根路も矢張り明治に引き繼がれて明治六年八月一等道路——東海道に指定されたが、悲

しいこころには湯本元箱根間沿道には是と言ふ生産物が無い、彌次さん喜多さんが冷かした挽物細工位が主要な生産物だ、夫れに引き換へて大平臺や底倉の方には自然が恵んで呉れた温泉が湧く、自然の力を自分に利用しやうとする人間が其の方に眼を向けるのは當然だ、そこで温泉地帯の開墾、その爲には道路を拵へるのが必要だと言ふこころに爲つて、明治十八年三枚橋から塔の澤迄に新道



往 昔 の 箱 根

と言ふので、明治二十一年塔の澤から宮の下までの道路を拵へた、併し是だけではまだ後方に控へてゐる小涌谷やら昔から名高い蘆の湯の開発にはならぬので、明治三十五年、時の知事周布公平が此區間の道路改良計畫を樹てた。

夫れは宮の下から箱根町までに幅二間半の道を拵へやうと言ふのである、工事費四萬八千六百九十圓、政府から三萬圓の補助を貰つたそうだが、また資源が足りないのので、舊道にあつた並木の一部を伐採して改良費に充てたそうだ。三十五年に起工して三十五年五月に竣功せしめた、

そのお蔭で小田原と箱根の町とが連絡するやうに爲つたが

之が爲にそろ／＼舊箱根路は世間から忘れられるやうに爲つて、明治四十一年には遂に改良された新道を國道とし此古い歴史を持つ舊道を里道に落してしまつた、大正の御代道路法が制定され國道の路線が定めらるゝまきも、矢張り舊道は顧みられないで四十一年に定めた路線を國道とした、夫れで徳川時代からの箱根路湯本元箱根間は資格を低下され一時は町村道に落されたが、夫れでも昔の効勞を追賞されたのか大正十二年になつて府縣道湯本元箱根線として維持されることゝ爲つた、今はお陰で所々に改良工事が施され、自動車を通る位に改良する計畫ださうだ。舊蹟保存論者は惜むであらうが、交通價値を目的としてゐる交通政策の上からは亦已むを得ないであらう。

○
新國道沿には溫泉旅館が擔を並へて立つてゐる、天下の公園だなんて意張つてゐるが、明治時代に開鑿された道路のお陰で、此道路一本で生活してゐるやうなものだ、大正

の大震災は命の親を頼む折角の道路を滅茶苦茶に壊してしまつた、山腹の崩壊で以前の道路は何處だつたか判らないのもあつた、併し世の中は何が幸になるか判らない、復舊工事には自動車交通を標準にして造りあげた、幅は三間、坂路でも急な所で十分の一、屈曲でも一番悪い所で三間の半徑だ、此山奥に此路があるか疑はるゝ程立派なものだ、私の尋ねたい沿道の舊蹟は曾我兄弟の墓や多田滿仲の墓位だが、舊蹟の無いだけ道は新式に出來てゐる。

○
元箱根——元和四年箱根宿を設けられてから元の字を附けて元箱根と言はれてゐるが、あの名高い熊野權現と並び稱されてゐる箱根權現が在るので、箱根權現領となつて何れの村にも屬しない孤立した地域だつたのださうだ、天平寶宇元年に萬卷上人が靈夢の告げで建てた箱根權現、日本の歴史を彩る玉公諸將が崇拜した神社だけに、今も其の莊嚴さは參詣するものゝ襟を正さしめる建立後再度焼けたが

東關紀行に言つてゐるやうに、權現垂跡のももる氣高く尊し、朱樓紫殿の雲に重なる粧、唐家の驪山宮かこ驚かれ巖室石籠が波に臨める影、錢塘の水心寺もいひつべし。こ賞揚した箱根權現こ蘆の湖、何こ言つても山中隨一の名所だ、古來此處を旅した幾萬の人、無量の感慨に打たれなかつたものは無からう。蘆の湖があつた爲に建てられたのだらうか、權現お手洗の池こ言はれてゐる蘆の湖は、林權山が丙辰紀行で言つてゐる通りに、神靈のすむ所なりとて、いにしへより人のつゝしみ畏れて今に入る事も待らず、舟を浮べてめぐりあるく事はありこなん。で、今も水泳などは許されてゐない、唯だ姥子方面に航する汽船があるだけだ、神奈川縣は之を水道の水源地こしやうか發電の原動力に使はふかこ目論でゐるらしい、いくら靈池だこ言つて唯だ保存して置くだけが能でない、人間生活に利用してこそ却つて權現様の思召に叶ふのだ。

はこね山やまにもさいの川太郎

そのいたゞきのさらに水うみ。

史 料

こ馬琴が壬戌霧旅漫録に筆した賽の河原、いまは國道こ湖の間に保存されて澤山な石の塔が建てられ旅人の心を浮世の外に誘ひ出そうこしてゐる、昔は此所にあつたので無かつたらしい、馬琴が旅した時代や改元紀行等は地藏堂があつたこきを録してゐるが、今は其の跡形もない、此所で捨てられた舊箱根路が出合つてゐる。

名高い箱根の關所、今は其の跡だけが史蹟として保存されてゐる、いつ關所を設けたのか随分議論があるらしいが、徳川幕府が旨く利用したのは事實こしても、夫れを開いたのは徳川では無いこ言ふのは、承久の亂に鎌倉で評定したこき、足柄箱根兩道に關を固め官軍の南向を待つこきを相談してゐるからである、が併し夫れが徳川時代を利用された關所かさうか判らぬ、今の關所跡は箱根路を開いた元和四年のこきに設けたのだらう。

今も旅する人は、歸家日記の主人公や彌次さん喜多さん

の旅を思ひ出して恐ろしかつた關所の昔を尋ねないものは無い、關所の横、小高い丘に上つて見るこ一眸のうちに西から来るものを見附けることが出来、南には遠く鞍掛山の嶮、北には蘆の湖、と言つた調子で、關所としては申分のない箇所だ、正徳元年に定められた御關所御定に依つて證文が無ければ交通の出来なかつた時代を自動車の中で想像してゐる間にいつか過ぎ去ることが出来る、聖代に生を享けたものは喜ばずに居られまい。

明治時代にやつた箱根國道の改修は、此處箱根町で止まつてしまつた、夫れで此處から先き静岡縣の三島町までは徳川時代の昔の儘の石疊道で捨てられてあつたが、之を改良せなければ箱根までの改修の効果が擧がらないと言ふので、大正十年に神奈川縣と静岡縣が協力して改修することに相談して工事費十七萬圓を投じて同十年から十五年に亘つて延長千二百間の所を幅四間半に改良した。

改良された道路は自動車の交通を標準としたので、昔を物語る舊道を捨てたが、路線の選擇には随分議論があつた、夫れと言ふのは近か道はかりが能でない、旅する者に自然が與へて呉れた蘆の湖の景勝を看賞するやうに選線せなければならぬと言ふのであつて、新道は之を餘程盲く採り容れた、旅する人が此處は日本ではない、水の國スイスに行つたやうだと言ふでゐる。